
く運命はその手の中に - sorrowful the ROMANCE SING STORY -

翌檜.Rën

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝く運命はその手の中に s o r r o w f u l t h e R O M
A C E S I N G S T O R Y

【Nコード】

N 6 4 1 1 B

【作者名】

翌檜・Rën

【あらすじ】

『もしも希望が闇の中に眠っているなら彷徨いながらそれを手に入れる勇氣はあるか』——突如として世界に出現した狂生命体「ネヴァン」。それに対抗するのは、矮小な・・・されど大いなる力を持ちし子供達……。これは、悲しき宿命を背負った者達の悲愴なる戦記である。 >>連載停止中<<

序奏 / atonement for one's sin 悲愴にて

もしも希望が闇の中に眠っているなら 彷徨いながらそれを手に
入れる勇氣はあるか――

……そこでは、空には黒煙が舞い、地には灼熱の炎が燃え盛つて
いる。

人々は逃げ惑う。

荒れ狂う炎から。崩壊する建物から。そして、魔の者達から。

彼らがいつこの世に現れたのかは誰も知らない。

彼らは人間を襲い始めた。

彼らは、異形をしているかと思えば獣の姿をしているのもいる。
獣の姿をしているかと思えば人の姿をしているのもいる。

人の姿をしているかと思えば巨大な兵器の姿をしているものもい
る。

人は呼ぶ。彼らをケルト神話の「狂乱」の神の名で。

「ネヴァン」と……。

2017年 9月7日

「う、うわわわあああつつ！。ネ、ネヴァンだあツツ！。」

「逃げるーッ。急げえッ!!」
「いやあああッ!!」

それは、確か俺が15の時だったと思う。

その日……ついに、俺の住む街にもネヴァンが現れた。

現れたネヴァンは異形や獣の容姿をしている「セプテム」と、漆黒の身体と四肢を持つ「マズル」。

奴らは、街のはずれにある山から侵攻してきて街にいる人たちを・
・・動くもの全てを攻撃しだした。俺は、奴らが街に侵攻してきたのを家の二階の自分の部屋からみて背筋がゾッとするのを感じた。
そして、すぐさま妹が俺の部屋に入ってくる。

「に、兄さんアレ、ネヴァ・・・」

「馬鹿、静かにしろ!!!!」

俺は妹の口を手でふさぐ。

そして、すぐさま妹の手を引き、天井にある取っ手を引いて天井裏への階段を降ろし、急いで上り階段をあ再びあげる。

そして、その後は物音一つ立てずじつとしておく。

「・・・・・兄さん・・・どうするの・・・・・?」

妹の問いかけに、俺は音をたてないように身振り手振りで「ちょっと、黙ってる」と云う。

それを見て妹は黙る、

それは、とても長い時間だった。

外からは、人の断末魔の声や爆発の音が幾度も聞こえ、そのたびに俺と妹は声を出しそうになるがその衝動を必死にこらえる。

そして、ついに俺の家にも奴らが入り込んだのか、下のほうで様

々な物の破壊音が聞こえる。

さらに、奴らは階段をのぼり二回へと来ようとしていた。

ギツ、ギツと一段一段階段を踏み鳴らす音が聞こえる。

そして、奴らはとうとう二回へとたどり着く。

部屋部屋を探索しているのか、すぐ真下からガサガサと音がする。隣にいる、妹の体が強張るのがわかる。

……永遠にも、思える時間、奴らは部屋の中を探索していたが、ついに奴らは窓を突き破り外に出ていった。

そして、しばらくした後、奴らの気配は消え去った。

……街は酷い有様だった。

家々は破壊され（そのなかで何軒かは燃え盛っていた）木々は薙ぎ倒され、全ての生き物は

蹂躪じゅうりょんされつくされ、殺されていた。

「うつ……く……、酷い……」

妹は当たらに散らばる死体を見て、嘔吐している。

俺は……空虚だった。無残に惨殺された知り合いを見ても顔色一つ変えずに、ただ……その光景を頭の中で否定していた。

「おーい」

そんな声が聞こえる。

声のした方向を向くとそこには、対ネヴァン用の装備をした自衛隊の人が居た。

・・・・・・そこに、・・・・・・一人・・・・・・で。

！？

俺がそのことに気付いた瞬間妹はすでに駆け出していた。

近づく妹。それを、見てそいつは笑った。人間ではできないほど顔を引きつらせて。

「―――っっ！！戻れッ！！そいつから離れろ！！」

「えっ？」

刹那、そいつの身体から無数の触手が伸び・・・・・・妹の背後に紅い華が咲いた。

触手はグチャグチャと、妹の体を破壊する。

「あ・・・・・・にいさ・・・・・・逃げ・・・・・・て・・・・・・」

そいつは、血に塗れた触手を下卑た笑みを浮かべながら深紅の舌で舐め採っている。

「あ、あああああああああああッッッ」

俺は呻く。

そして、やつはその呻きに呼応するかのように、触手を一瞬で俺に伸ばしてくる。

そして……俺は……。

ゆさゆさ……ゆさゆさ……

……誰かが、俺の体を揺さぶっている。

俺は、重たいまぶたをそつとあける。

すると、目の前に一人の少女の顔が現れる。

日本人らしい清楚で緩やかな顔立ちをしており、前髪は少し目に掛かっている。俺の顔を覗き込むその蒼い瞳だけが、彼女の家系に外国人が居るのをあらわしている。

「ん……どうした……詩織^{しおり}」

俺は、眩い電灯の光が起きぬけの目に痛く、目を細めながら少女……桜木詩織^{さくきしおり}に言う。

すると、詩織は服のポケットからメモ帳とペンを出し、流暢にペンをメモ帳上で動かす。

書き終わると詩織はそれを見せってくる。

『京介、うなされてた。すごく、うなされてた』

「そんなに、うなされていたか？」

俺がそう言っていると詩織は『うん』とメモ帳に書いて俺に見せる。

「そうか……そんなに、か……」

……俺の中では、あの出来事は今も忘れられることなく、俺の精神を蝕んでいる。

だから、俺は奴等を殺す。

別に俺は人類がどうなろうと知ったこっちゃない。

善良で無力な一般人を護るといふのはあくまで建前。

俺は……奴らが滅びるまで戦う。

それが、終わりになき戦いであっても、俺は死ぬまで戦う事をやめはしない。

それが、生き残った俺の責務だから。

それが……俺なりの贖罪だから……。

第一章「出違い、first contact」

ネヴァンが拠とする関東に代わり、遷都を受けた兵庫。その神戸の市街の中心、新議事堂を囲む様に設立される、最高裁や、警視庁や他省庁の建物の一角。

4月5日、新防衛省は例年通りに全国に、災害勧告を發布する。十数年前突如として地球上に現れた、破壊の為に生き、破壊の為に死す、ケルト神話の狂乱の名を冠する生命体「ネヴァン」。春先、日本中のネヴァンの一種である、セプテムと呼ばれる、異形、又は獣の姿を取る者達は、日本侵攻の戦「大破壊」の折、巣とした東京へと一斉に回帰する。理由は、深い鈍色をする球体……セプテムの卵。そこから生まれ来る子の育児の為。

回帰事、育児事のセプテムは、どの様な時と比べても、凶暴となる。しかし、その進路を阻害する事が無ければ、本能的に育児を優先とするセプテムが襲ってくる可能性は少ない。その為、この時期様々な方面、場所に展開している自衛隊の三分の一は、例外なくセプテムの予測される進路に入る街の防衛任務に着く。そして、残りの者達は、この隙を突き侵攻してくる、他の種類のネヴァン……漆黒の体に四肢を持つ人型「マズル」。巨大な蝙蝠と言うのが最も近い形容である「ルムド」。生命体としては疑いたくなる、金属感を体に表す、巨大な生体砲台「ソクラート」。

その姿通り、粗暴な行動をするセプテムに比べ、他の三種は計算された「軍団」で動いており、多少なりとも油断し、隙を見せれば、“そこ”を狡猾に狙い、破壊の限りを尽すだろう。

2020年 4月5日

事務的な部屋。

まず、第一印象に狭さと、低い天井が、圧迫感を与えて来る。ま

た、その室内に、8の人間が居る事が、その事を更に強烈にしていた。

部屋の狭さを作り出す原因の一つを担う、両側にある鉄製の厳めしい本棚に挟まれ、二列に並ぶ三つのパイプ椅子と二つの折り畳み可能な、長いパイプの机。その椅子の前列、そして後列の左端には、二人の少年と二人の少女が。後列左から二番目、右端には自衛官が毅然たる態度で席に着いている。

そして、彼等の正面、この場所に似つかわしくない、最新の電子モニターを背に、精悍な顔立ちをする男が立って居る。男は、その厳つい顔に、沢山の傷を勲章と言わん許りに刻んでおり、その漂わせるオーラは、紛れも無い歴戦の「兵」^{つわもの}が纏う雰囲気であった。

「本日、防衛省より、災害勧告が發布されたのは、諸君とも既知であろう。だが、それとは別に、ある一つの命令も同時に自衛隊に下った」

男は、一呼吸間を開け、口を開く。

「Operation Awaken Dominant……その名の元に、自衛隊は、我々の行動を一切黙認するそうだ」

「つまり……それは何があったとしても、完全に秘匿される……と言っ事ですね」

そう、前列の左端に座る少年……^{さきさききょうすけ}鷺沢京介が言う。

「うむ。自衛隊の高官や、官僚共は目に見える力と戦果にしか興味を示さない。……自分達に利があるものしかな」

「……彼等は、世界の破滅なんかは、目に入らないのでしょうか……。目先の物欲のみに固執……いや、妄執して」

後列中央に座る、自衛官、小倉^{おぐら}総司^{そうし}曹長がそう呟き、それに呼応し、隣りに座るもう一人の自衛官、新冠^{にいかつぐん}號軍曹が、無骨な表情と無言で頷く。

「……まあ、暗澹とする政治機構に、今更文句を言っても始まらない。とにかく、今一番重要なのは、遂に我々にも、出撃許可がおりた事

だ。我々は、以後“ラボ”を拠点に、対ネヴァンの独立遊撃隊となる。ここ、広島に展開する自衛隊のうちの一つ、私が統轄する第2312機巧中隊の微力な支援のみを元にな

その言葉に、全員が息を飲んだ。

「そして、さっそく出撃要請が来ている」

「Dトルーパー、鷺沢京介一等兵、桜木詩織二等兵、生天目優二等兵、Recheca^{レシェッカ}申道^{しんどう}二等兵。及び支援戦闘要員、小倉総司曹長、新冠號軍曹。…総員出撃……！」

第一章 二話

「ねえ… ちょっと」

先程、鮪詰め状態であつた、作戦立案室よりも、更に狭隘な、フリーフィングルーム 現在のよりも四世代ほど旧型の陸自の装甲輸送車の車内、また左右で座るのを分けて見た時、左側の座席の前から順に、たった今、誰に対してもでもなく、声を放った、見た目「普通」と言うのが一番相応しい風貌の生天目優。寡黙に徹しているのか、只たんに話したくないのか、もしくは失語症なのか…。とにかく、声を全く出さない桜木詩織。そして、名前で分かる様、親に外人が居るのを表す様な亜麻色の髪をポニーテールにしているのが印象強い、Rechec a 申道。

「私達、もうだいぶ前から、Dトルーパーに在籍してた訳だけど、顔を合わせたのは、今日が初めてな訳じゃない？ だけど、統轄ラボに着いて直ぐに、会議になったから、自己紹介も何も出来なかったから、今軽くしときたいと思うんだけど……」

優は、特にDトルーパーの主力で、自らと同じ「ドミナント」である、京介と詩織とレシェッカの顔を伺いながら言うも、三人とも沈黙のみを返した。

「えーと……」

戸惑う優を尻目に、右側の一番後ろに座る総司が静かにため息をつく。

「やれやれ、お前達これから生死と生活を共にするんだぞ？ 全く…。俺は、小倉総司。新選組の沖田総司の総司な。年は、23と、お前達とは少し離れてるし、一応俺は、お前の管理官と言う事になつてるが……。まあ友達感覚で付き合ってくれ。宜しくな」

言葉を紡ぎ終わった後、総司は隣りに座る號を肘でつつき、自己紹介をする様促す。が、號は相も変わらず、厳めしい表情のまま、口を開かない。

「あー……見た目によらず、シャイなんだ。…コイツは、新冠號。怖くて、ゴツイ顔してるが、一応俺と同期だ。いい奴だ。…敵めしいが」

號は、最後に付け加えられた一言に、言い過ぎだと言わんばかりに、敵めしい顔のまま、目だけをギョロリと向かせ睨むが、既に目の前に座るレシェツカに自己紹介をする様に促す為、外方そつぽを向いている総司は全く気付かず、代わりに（顔を）見ていた優と視線がぶつかり、優を恐怖で震え上がらせた。

拒否をするも、執拗に自己紹介を促されるレシェツカは、渋々と言った感じで口を開く。

「……Reche ca」申道。14歳。両親は知らない。EXクローン体だから」素っ気なくレシェツカはそう言うも、彼女以外の全員は、目を見開いた。

EXクローン体。それは、遺伝子…特にクローンに関しての研究促進の為に、研究者が自らの遺伝子を元に作り出し、「科学の発展のためには、犠牲が必要」という、暗黙のスローガンの元に、非人道的な研究の対象となる者…。それが、Experiment c lone。略称、EXクローン。

現在、クローンやES細胞等の、バイオエシックスに関わる研究は、地球上に於いては、法度の事であり、研究が露見すれば、どの国でも無条件で極刑となる。

「私のオリジナルは、既に亡くなっていて、私はオリジナルのEXクローンの二次クローン。去年の今頃私を研究してるのが、見つかったんだけど、たまたま私にドミナントとしての能力が備わったから、私の徴兵許可証への調印と引き換えに、無罪になったから、その人が一応の親代わり。」

そう言い切り、隣りに座る詩織に、どうぞと静かに言う。

が、また詩織も又何も口にしない。ただ、その代わりに懷を探り、取り出したメモ帳に、一緒に出したボールペンで、サラサラと何かを書く。一分弱。それで書き終わった詩織は、メモ帳を皆に向ける。

そこには、少々乱れているも、完璧な楷書で、自己紹介が書かれていた。

『私は桜木詩織。14歳。訳があつて喋ることが出来ない。能力は、^{ちから}アイジス AEGIS』と呼ばれている。宜しく。』

全員が見たのを確認し、詩織はボールペンで優にどうぞ、とジェスチャーをする。

言い出しながらも、少々の逡巡の間の後、優は口を開く。

「えっと、あたしは優。生天目優。15歳。戦いとか、争い事とか苦手なんだけど、その…お父さんが、陸上自衛隊の統幕議長をしていて、だから…徴兵されました。皆の足を引っ張るかもしれないけど、宜しく願います」

そう言い、頭を下げる。そして、全員の視線が京介に向く。

「鷺沢京介。16歳」

それだけを言い、京介は俯く。

「おいおい、京介って言ったか？ちよつと簡潔過ぎるだろ」

総司がそう言うと、京介は俯いたまま呟く。

「それ以外に何か？何かあるんでしたら、質問して下さい」

総司は、これからの管理官としての業務に一抹の不安と、軽い頭痛に襲われながらも言う。

「分かった、なら質問しよう。なんでお前階級が他の奴と違って、一等兵なんだ？」

「……………多分俺が、自分からDトルーパーに仕官したからじゃないですか？」

その言葉に、総司が驚きの声を上げる。

「マジかよ。物好きだなあ、お前も」

「……………」

京介は、自分の境遇も知らず、ベラベラと喋る、総司に対して強い嫌悪感と殺意を抱いた。

しかし、それは次に総司が口にした言葉で完璧に、払拭された。

「…………… 大事な者を亡くした奴は、お前だけじゃない。哀しむなどは言わねえが、フツ切らない奴は、管理官権限を使って、出撃させないからな」

そう言う、総司の。自分を見る、詩織の、優の、レシエツカの、號の。

皆のその双眸に、自らが携える、哀しみと同じ色彩を京介は感じた――。

作戦領域に到達。総員下車

第一章 三話

「ラボ」より、凡そ2時間。

広島市、安佐南区の「中筋」「西原」「祇園新橋北」そして、最終防衛拠点がある「不動院前」が今回の作戦の主舞台となる。

此度の作戦内容は、広島に現存する唯一の国宝「不動院」と呼ばれる寺院を、セプテムの移動から防衛する事と、不動院すぐを流れる太田川にかかる、交通の要所「祇園新橋」の防衛である。

現在セプテムは、中筋の北の緑井、北東の安芸矢口と呼ばれる地域から、真っ直ぐに祇園新橋方向に進行しており、その総数は凡そ4千である。数自体は少ないが、当たりは閑静な住宅地であり、国民の財産を守るのが使命である、自衛軍は対ネヴァン戦で主力となる、自走砲や榴弾砲、個人用携帯重火器等の広範囲に被害が広がる兵器が使用することができず、故に確実沢山の敵を倒すことができずに、ジリジリと後退せざるをえなかった。

……安佐南区の防衛の任にしているのが、第2312機巧中隊……つまり、戦車などを最主力とする部隊であるから、それは尚更であった。

「各機主砲起動。照射ポイントL34からM11迄を6秒間」

アストラムラインと呼ばれる市内電鉄の路線を頭上に、第2312機巧中隊所属の四機の式式機動砲台が搭載する荷電粒子砲塔が一斉に光子を淡く放射させて煌めく。

「5、4、3、2、1、撃えッ!!」

指揮官の号令と共に四つの砲塔が輝き、それぞれから一斉に荷電粒子が絶えなく放射される。

その射線軸にはその進路にある邪魔な物を破壊し尽くすセプテムの群が居り、荷電粒子の照射を受けたセプテムは次々と体を蒸発させて消えていく。しかし、数の差は如何ともし難く、幾らビームを放つても倒せるのは群の前面にいるセプテムのみで、次から次へと奴らは抜けた穴へと入ってくる。

そして、遂に自衛官達の人生の終わりの時が来た。

機動砲台に取り付くセプテムは、まずその鋭い爪で鋼鉄をも易々と引き裂き、搭乗する自衛官の体に食らいつく。

セプテムに襲われた者は、断末魔の声すら上げ事が出来ず、一みにされるか、爪同様に鋭く尖る歯で四肢を咬み千切られ、臓腑を貪られる。

運良くセプテムの到達前に逃げ出す事が出来た自衛官も、重量があり大した速度でない機動砲台に乗っている故に逃げることは出来ない。

やはり、機体を裂かれ今度は高くに放り投げられる。

「う、うあわあああああ」

先ほど、指揮を執っていた自衛官が叫ぶ。

下には、他の隊員の血で、赤黒く染まるセプテムの口。

運良くその口から逃れられても周囲には他のセプテムもひしめき合っている。

彼は、死を覚悟した。

『領域発現』

不意に心に響いてきたその言葉。

それと同時に、体が落下する感じがなくなり、その代わりに体がフワフワとしている。

自衛官は、おそろおそろ目を開けると、驚愕した。なんと、自分の体が中に浮いていた。しかも、セプテムの口から凡そ1メートルあたりの所で。

「なっ」

今度は、セプテムへの恐ろしさではなく、未知なる現象への畏怖に心を苦しめられる自衛官。そんな彼に、声がかけられる。

「第2312機巧中隊副長兼任第三小隊長柴崎中尉、救援に参りました」

数多の蠢くセプテムの眼前。

そこには、少年と少女が居た。

一人は、鷺沢京介と言う名の。

一人は、桜木詩織と言う名の。

第一章 三話（後書き）

昔住んでいたところを舞台にして、臨場感を出そうとしたのですが、うまく地形説明が出来ませんでした・・・。

第一章 四話

「…桜木、脇道から敵が流れている。俺はそいつらを片付ける。お前は、ここを守ってくれ」

そう言い、京介は詩織を残して路地裏に駆ける。

詩織は、それを横目で見届けた後、視線を目の前のセプテムの群れに移す。

ざっと見て、確認できるのは四足歩行、犬型。虎と、兎が合体したような異形のセプテムがだいたい半数ずつ、凡そ40体が居た。

通常、歩兵がセプテムを相手にする場合、相手にするセプテムの五倍の数が必要とするのがセオリーである。しかし、詩織はまるでその様なことなど気にもしないように、セプテムとの距離を詰める。

そして、対峙する距離が5メートルに達した瞬間、最先頭に居た犬型セプテムが雄叫びを上げ飛びかかってきた。

詩織は、そこから動こうとせずに、ただ手を前に突き出す。

セプテムの牙が、詩織に届く瞬間——そのセプテムは、真後ろに目視出来ない

、謎の「絶対」的な力にはね飛ばされた。

『イージス対有絶対不可侵領域』

その名称を持つ、詩織の能力。

それは、呼んで字の如く『有体』……つまり、森羅万象に於いて、その存在が『

有』のモノ総てを拒む、詩織が纏うパーソナルスペース。

それが、詩織のドミナントとしての能力。

先程の一体は、ふつとばされ、仲間に踏み付けられ死んだ様だが、次は別のセ

プテムが我先にと詩織に殺到する。今度は、一直線ではなく広く個体個体が散っている。

詩織は、突き出す腕をそのままに、くるりと一回転し、言葉にはならないが心の中で呟く。

『……Hemisphere展開』
ヘミスフィア
Hemisphere……半球の意。

まさしく、単語通りに詩織の中心に周囲を囲む様に、詩織の念がドーム型の障

壁を展開する。‘壁’は、目視する事が出来ず、何も知らずに突っ込んで来たセプ

テム達は次々と犬型セプテムと同様に、壁に干渉を拒否され勢いを付けて後ろ

に飛ばされる。それにより、後に続々と続いていたセプテムの長蛇の列は大きく

乱れた。

互い互いがぶつかりあい、押し揉まれ、時には鋭利な外殻や、爪・牙等にその

身を裂かれるセプテムもいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6411b/>

輝く運命はその手の中に - sorrowful the ROMACE SING STORY -

2010年10月20日17時47分発行